

病院と診療所の連携を深め 必要な患者に必要な医療を

両毛広域圏とは、栃木県の足利市・佐野市・群馬県の桐生市・太田市・館林市・みどり市・板倉町・千代田町・明和町・邑楽町・大泉町を指し、古くから文化・生活圏をともにしています。両毛広域圏における救急医療体制においては、足利市救急救命センターが唯一、生命にかかわる高度な診療機能を備える、三次救急医療体制に設定されています。このような中、救急車受け入れの約1割が、桐生、太田、館林の消防本部から搬送されています。今後、高機能化される新足利赤十字病院の開院と、北関東自動車道の全線開通、各県ドクターヘリの運用等により、両毛広域圏はもちろん、域外からの救急患者の受け入れが増加するものと思われます。

両毛広域圏の救急医療

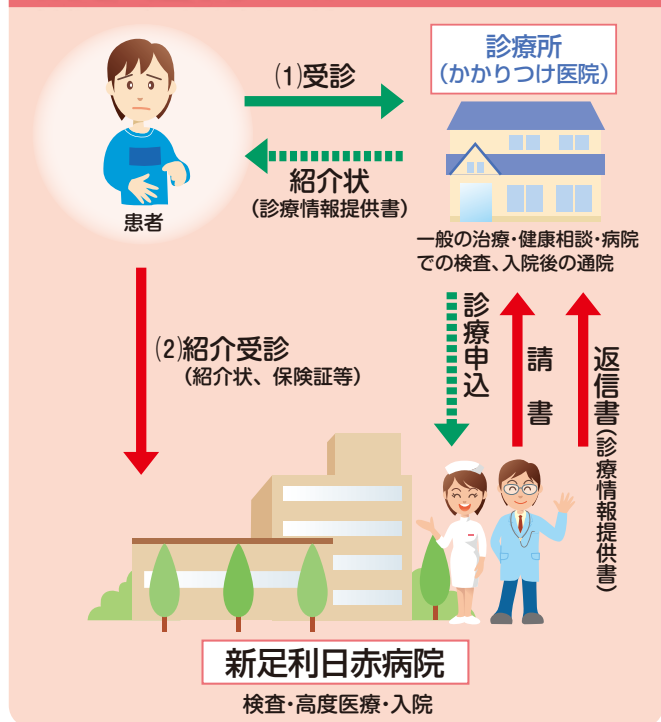
救急医療のコンビニ化・大病院志向

本県の救急搬送数は平成8年の約4万2千人から平成18年には約6万4千人と、この10年間で約2万2千人、53%増加しています。しかし、救急患者の8割以上が軽症患者であり、まさに救急医療のコンビニ化といえるでしょう。これにより勤務医や看護師は大きな負担で疲弊し、一般患者は「3時間待って3分間の診療」を嘆き、もはや限界との声も上がっています。二次・三次救急を担う地域の中核病院の疲弊によって、本来果たすべき重症・重篤患者への対応に支障が生じてきており、救急医療を取り巻く環境は極めて厳しい状況といえます。

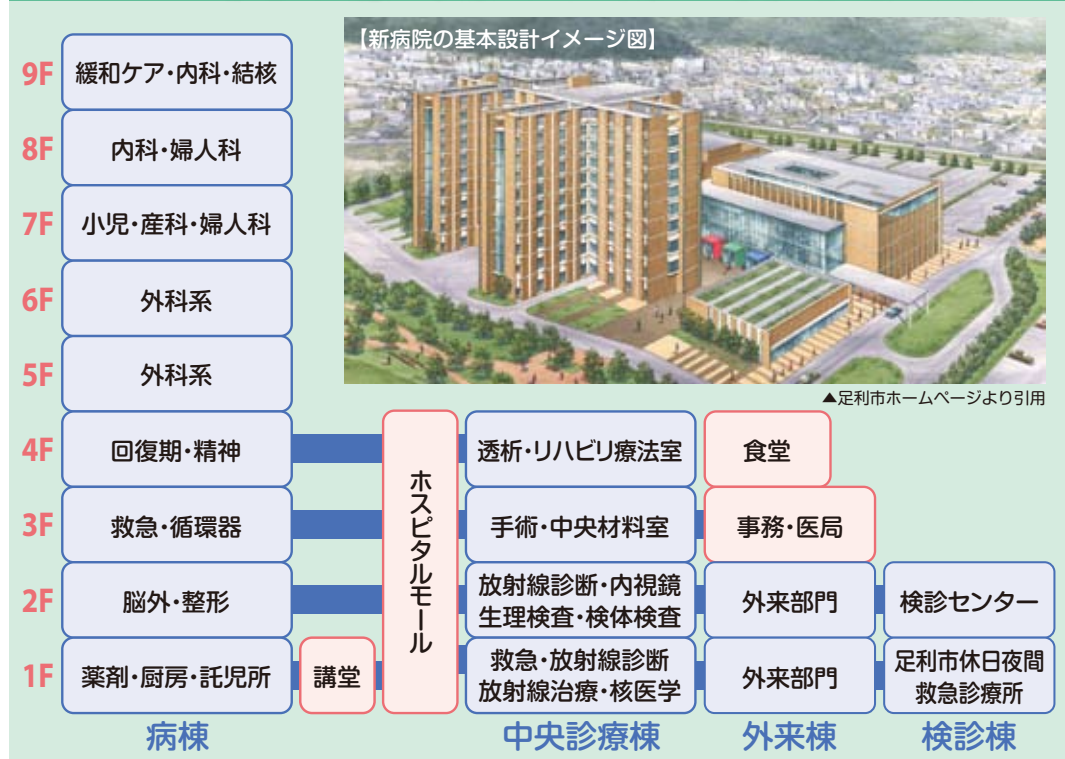
病診連携・病病連携の重要性

特殊な医療を除く一般の医療（風邪や下痢、生活習慣病など）や、健康相談は近所の診療所・開業医（かかりつけ医）が担い、手術や入院の必要な医療は病院が担うなど診療を分担するとともに、診療所と病院の連携を深め、必要な患者に必要な医療を施す必要があります。このためには地域の医師会と中核病院等が日ごろから相互に医療機能などについて情報交換を行い、日赤とかかりつけ医・日赤と他の病院などの連携協力をすることが重要であり、患者側もこれら医療機能の連携を理解したうえで、受診することが求められます。

病診連携とは.....



新足利日赤病院はこうなります



無料個室も備えられた病室

救命救急病棟、回復期リハ病棟、結核病棟、精神科病棟、小児科病棟以外は、全室個室となります。個室のメリットは下記のように様々あります。入院費用が高くなるのでは、と心配される方もいますが、無料の個室も多く存在します。それは、室料を徴収する部屋数は、施設基準により総ベッド数の5割以下と決められているからです。なお、無料の病室を希望したにもかかわらず、空いていない場合は個室でも無料となります。患者の負担を抑えつつ、より良い治療を受けられる個室化は、我々が提案する“市民のため医療政策”に合致するものと言えます。また、さらに無料個室を増やすよう働きかけていきます。

個室化のメリット

- 院内感染の予防が期待でき、プライバシーも保たれます。
- 対人関係、消灯時間や面会時間の制限、セキュリティ、男女同室を避ける部屋移動なども個室化により解決可能となります。

編集後記

今、子宮頸がんワクチンが話題となっています。ヒトパピローマウイルス（HPV）の感染が原因で起きる子宮頸がんは、ワクチン接種で予防できる唯一のがんと言われています。しかし、接種は3回必要で、費用は1人当たり4万～6万もかかります。そこで、接種費用の全額助成を打ち出す自治体も出始め、大田原市では全額助成の集団接種を、5月に全国で初めて実施します。しかし、県内ではほかに3市町が助成をするにとどまっています。がん予防に、地域による負担格差が出ることは望ましくありません。ワクチンと定期的ながん検診で、子宮頸がんはほぼ100%防げるそうです。接種率向上のためにも、足利市は費用の助成に取り組んでいかなければならないと思います。